

周辺からの記憶7

～2012年度 京都、みつ～

村本邦子（立命館大学）

J R西日本あんしん社会財団助成募集に、通勤客や観光客が多く足を運ぶ京都周辺の駅で漫画展をやってはどうかと思いついて応募したところ、採択され、3月下旬、授賞式に出席した。正直なところ、たぶん儀式的な集まりだろうと思って行ったのだが、これがなかなか感動的な集まりだった。

この財団は、2005年4月25日の福知山線事故の反省に基づき、「安全で安心できる社会づくり」の一端を担おうと設立され、被害者ケアや地域の安全構築に関わる活動の支援、安全への啓発活動等を行ってきたという。活動助成、研究助成合わせ、今年度は70件が採択され、それぞれの団体の決意表明があった。被災地と交流する高校生のグループやスポーツ少年団、川遊びの安全マップづくり、グリーフケアや防災教育の試みなど、社会で活動するありとあらゆる世代のユニークな取り組みが紹介され、知らないところでこうして多くの人々が社会のためにあれこれ考え、試行錯誤しながら頑張っているのだなあと思った。聞いているだけでも、信頼や希望、安心が感じられるような気がした。福知山線事故の被害者や遺族を中心にしたグループも複数あった。詳しいことはわからないが、おそらくは、こうして応募し助成を受ける関係ができていくまでには双方の長い道のりがあったことだろう。どこかの電力会社や国にも見習って欲しいものだ。

この助成による取り組みは、東日本・家族応援プロジェクト番外編の「こころの防災プロジェクト」として、6月27日～7月5日、京阪三条駅の構内で開催準備中である。合わせて、プロジェクトの途中経過をまとめた本を出版準備中である。7月には出せると思うが、なかなか面白いものになったのではないかなと思う。いろんなことが面白く動いていく。よい兆しと言えるだろう。

準備

2 年目のプロジェクトが始まる。まずは予算確保。初年度不採択だった大学復興支援室の震災関連研究助成の総額を小さくして再度申請、昨年採用された復興支援助成にも申請して、今年は両方採択された。まずはひと安心だ。

それから院生たちへの説明会を兼ね、6 月に第 1 回目の研究会を開催した。プロジェクトに関心を持っている院生たちが集ってくれたが、昨年に引き続き参加してくれる院生のほか、新入生の中には、「プロジェクト HP に十年行くとあるのを見て、必ずしも復興支援に関心があったわけではないが、コミットメントという点で対人援助に大切なことではないかと共感し、プロジェクトに参加したいと思って研究科への入学を決めた」という者もいて、驚くとともに、届く人には届くのだと嬉しかった。

2012 年 8 月 17~21 日 京都

<京都の避難者たちのこと>

きょうと NPO センターからの呼びかけで、2012 年度からは京都でのプロジェクトをスタートさせることになった。7 月開催の第 2 回研究会では、きょうと NPO センターから野池雅人さんと藤野正弘さんを招いて、まずは、京都の避難者の現状について学ぶことにした。事務局長である野池さんは研究科の 1 期生で、昨年からプロジェクトを通じて修了生と在學生を繋ぐ協働ができるようになったことも嬉しいことのひとつである。

きょうと NPO センターは、京都市と京都府の社会福祉協議会とともに、2011 年 3 月 13 日、時限的に京都災害ボランティア支援センターを立ち上げ、2012 年 3 月まで活動した。センター長を務めた藤野さんによれば、多くが行政単位で災害ボランティアセンターを立ち上げたのに対して、京都市・府・NPO が一元でやったため、よく機能し、高く評価されたという。おもに、①情報収集と発信 ②被災地支援 ③京都のできる支援 ④物品サービス提供・仲介・マッチングという 4 つをやってきた。

京都にいる避難者は、行政が把握しているだけで 800 人。7 割近くが福島からで、幼い子どもを連れた若い母親が大半で、茨城も 3 桁。京都の受け入れは暖かいとの口コミや京都の支援情報を載せた「ほっこり通信」の影響か、京都の避難者は増えている。経済的な理由や自営、公務員や学校の先生など仕事上、避難したくてもできない人たちがいて、「避難できる人はいいいね」と言っている。避難してきた人たちは、向こうで歯を食いしばって生きている人がいるのに、自分だけ逃げてきたという負い目があったり、逃げたと責められ、家族・友人関係にもひびが入って孤立したりしている。二重生活を強いられ、経済的にいつまでもつのか、なかなか家族に会えず育児ストレスもたまる、子どものためにこっちに来たけれども、この選択が正しかったのかどうか毎日悩んでいる・・・などさまざまな声がある。

最近では、支援したい人のミスマッチが顕著。物資やサービスを提供したいという人たちがいるが、その段階は過ぎた。枚方パークや USJ に招待しますといったサー

ビスは、初期には良かったかもしれないが、避難者たちは、いつまでも施される立場でなく自分たちも役立ちたいと思っている。支援を受けながら生きるという生きづらさは何とも言えない。それでいて、そろそろ自立しなさいと言われる。避難した選択が正しかったのか毎日悩む人、罪悪感、京都に骨を埋めて暮らすつもりで、被災者・避難者ではなく一市民として生きたいと思うという人、思いはさまざまである。

話を聞きながら、過去の災害や事件の被害者たちのことを思い、時間経過とともにその存在は見えにくくなっていくこと、関わりのない人々にとっては見えなければいけないことになっていくこと、それだけに当事者は孤立して問題を抱え込むしかなくなることを考え合わせた。だからこそ、このプロジェクトでは、直接的な形で被災に焦点を当てるのではなく、「忘れてはいませんよ」というメッセージを発しながら、被災のことを話してもいいし、話さなくてもいいという形をとっている。

<京都でのプロジェクト>

「東日本・家族応援プロジェクト in きょうと 2012」は、8月17～21日、ウィングス京都にて開催した。内容は、漫画展、漫画トーク、子育て中の避難者向け「こころとからだお話サロン」「遊びワークショップ」で、報告は研究科 HP。

<http://www.ritsumeimei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sinsaiproject-kyoto.html>

今回は、地元でのプロジェクトだったため、プログラム開催日以外も院生スタッフが漫画展にアテンドしてくれた。ウィングス京都では、毎日さまざまな企画が開催さ

れており、漫画展は通路にあったことから、200名近くの人が眼にしたようだ。もちろん、全員が展示を見たわけではないが、足を止めて見てくれたり、スタッフと言葉を交わしたり、直接災害のことを話すわけでもなく、「東日本・家族応援プロジェクト」を開催していることから、何らかのメッセージ性はあったはずだ。

サロン以外は避難者に限定しておらず、避難者と名乗って参加してくださった方は多くはなかったが、案内を出したのは避難者に対してのみだったので、子連れで遊びワークショップに来てくださった方などは、案内を見て来てくださったのだと思う。京都にはたくさんの支援組織があり、日程の重なったイベントも複数あったと聞く。

支援機関とすでにつながりを持っている人もいるが、さまざまな事情や思いから、どこにも所属していない人たちが不確かさを抱えておられるようだ。とくに自主避難の場合、「自分の選択は正解なのか、間違いなのか？」という迷いが日々ある。避難によって失ったものが大きければ大きいほど後悔は強くなるだろう。放射能に関する正確な情報が得られないまま、自分の判断による選択の責任をすべて背負わなければならない厳しさをあらためて感じた。

2012年度の京都でのプロジェクトでは、日程の関係上、支援者支援セミナーのみ、12月11日10～14時、Nagomi（七條大宮）で開催した。支援者たちが抱えている現実には重かった。支援者のなかに住職などお寺の関係者たちが複数含まれており、当事者でもある支援者は、一人の人生はちっぽけだが、お寺は時代を超えて継承してくれるものがあり、お坊さんたちが関わってくれ

ることがありがたいとおっしゃっていた。
京都らしい側面かもしれない。



京都でのプロジェクト



2012年9月3～10日 むつ

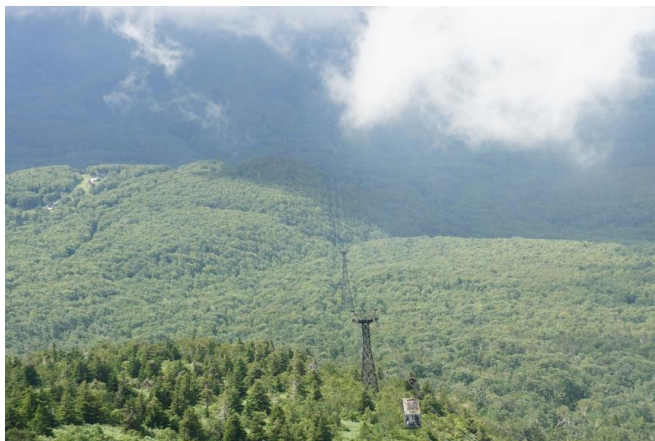
<フィールドワーク>

むつのプロジェクト期間は夏休みということもあり、一足早く青森に入り、フィールドワークをした。ロープウェイで八甲田に上り、樹海を見下ろしながら、日本にもまだまだ未踏の地があることをあらためて思った。荒々しく、そして謙虚な気持ちになる。温泉巡りを楽しみ、美術館や博物館に立ち寄り、六ヶ所村、原燃PRセンター、東通村を經由して、恐山、そしてむつ入りした。

運転していると、走るのに骨が折れる生活道や山道が、六ヶ所村周辺になると途端に広くまっすぐ快適に走れる道路になるということも体感した。気候の良いこの時期でさえそうなのだから、雪が降り始めたら、

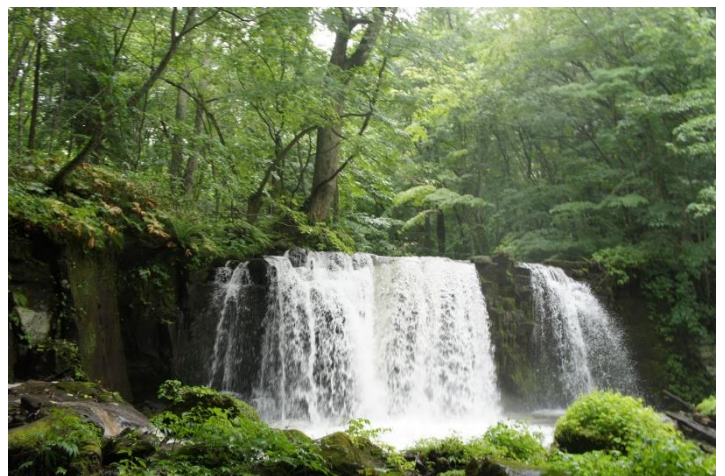
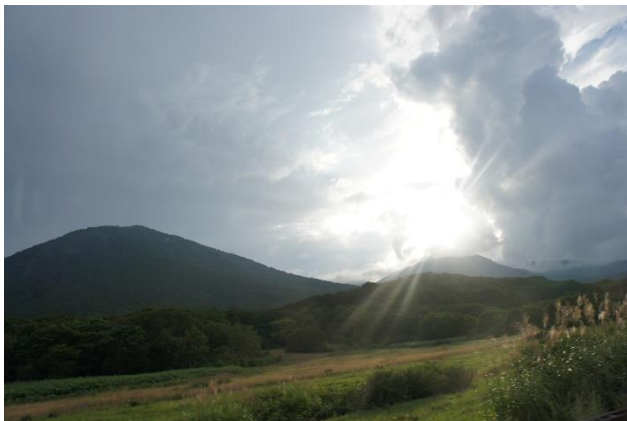
その落差は甚だしいものだろう。原燃施設、六ヶ所村再処理工場には近づくことができず、原発関連会社と思われる看板の掛かった小さな建物や、ものものしい柵で囲われた大企業の周辺を走った。

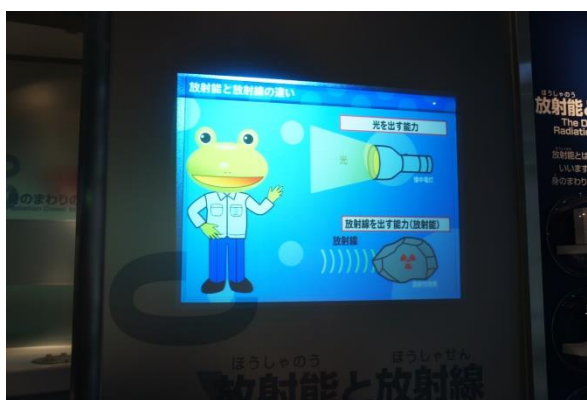
原燃PRセンターには見学者が数人おり、韓国からの訪問客らしき男性がいた。接待されている感じだったが、いったいどういう人なのだろう？週末ごとのキャラクター・ショー、原燃カレンダー写真展では応募作品からなる美しい青森の自然の写真展示があり、ゲームやクイズを使った一見科学的に見える展示や体験型学習機があった。展示から流れるメッセージは、「原発は温暖化の原因となる二酸化炭素を出さず、リサイクル可能な自然にやさしい燃料」というもので、現実には起こっていることを思うとやりきれず、すっかり気分が悪くなった。



八甲田







原燃PRセンター

周囲には風車がやけにたくさんある。六ヶ所村は春から夏にかけてヤマセ（北東風）が吹き、陸奥湾を超えて津軽半島平野からの西風も吹くという年間を通じて安定した風力発電を行える環境にある。現在 3 社で 77 基の風車を運転しているという。それなのに、他所の電力のために原発関連施設をたくさん抱えているなんて。そのまま 338 号線を上って東通村を通るが、一風変わった形をした体育館、官舎、消防署、小学校が並ぶテーマパークのような不思議な光景だった。本当に何も知らなかったと恥じ入る。

初めて訪れた恐山。これまでそういう名前の山があるのだと思っていたが、そうではなく、恐山とはカルデラ湖である宇曽利

湖を中心とした外輪山の総称だそう。地獄は一面、カラカラと乾いた白い岩場に石を積んだ小さな山が散在しており、ところどころ、硫黄のガスが噴き出し、周辺が黄色くなっている。おどろおどしい。地獄を通して宇曽利湖の方へ抜けると極楽浜。真っ白な砂浜と透明度の高い湖は異様に美しく、思わず入っていきそうになる。浜辺に 1 羽の黒いカラスがいて、何やら苦しそうに話しているので、じっと耳を傾けてみたが、結局、聴き取れなかった。

2012 年 7 月にできた鎮魂の鐘と希望の鐘のある記念碑が設置されており、参拝に訪れた人々が鐘をならしていた。境内にある温泉で身を清めて下山したが、相当な異文化体験となったフィールドワークだった。



＜むつでのプロジェクト＞

むつでのプロジェクトは、下北地域県民局、むつ市、むつ市教育委員会との共催で、9月3～10日、むつ市立図書館で漫画展、7・8日、むつ市中央公民館で各種プログラムを実施した。

<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sinsaiproject-mutsu2.html>

プログラムは団さんの漫画トーク、中村さんと私がファシリテートする支援者支援セミナーの他、中村さんの「お父さんのコミュニケーション教室」と並行して、地元の方々が「キッズセミナー（パンづくり）」を準備してくださり、子どもの焼いたパンをお父さんと一緒におみやげに持って帰るというものだった。

むつのスタッフがチラシを作ってくれたが、サブタイトルには「本州のてっぺん下北半島から家族の笑顔を」とあり、「立命館大学と本州最北の地元自治体の協働により、実現したこの企画は、『家族支援』という視点から地域の家族力向上及び被災地や被災者に対する復興の一助とすることを願い、サブタイトルには少しでも元気のある地域から被災家族を応援しようという思いを込めました」と記載された。プロジェクト実施にあたり、現地共催機関のスタッフたちが6回も会議を重ね、昨年の振り返りに基づいて、さらによりプログラムをと工夫してくれたことが随所に感じられ、こちらのモチベーションも上がる。

私は中村さんと支援者支援セミナーを担当したが、初めに自己紹介と知識編としてそれぞれ短い話題提供を行い、後半は実践編としてワークショップ形式で事例検討を行った。中村さんの話題提供は、男性に焦

点をあてて暴力や虐待をなくす取り組みをしていること、家族をシステムとして見ること、父親役割が家族システムを健康的に機能させる際にどんな役割を発揮するかについてだった。私からは、女性問題、ジェンダーの問題に取り組んできたが、西洋型の個人主義をモデルにすることに無理があること、かと言って伝統的な役割分担が孕む暴力や抑圧が肯定されるものではないことを話した。

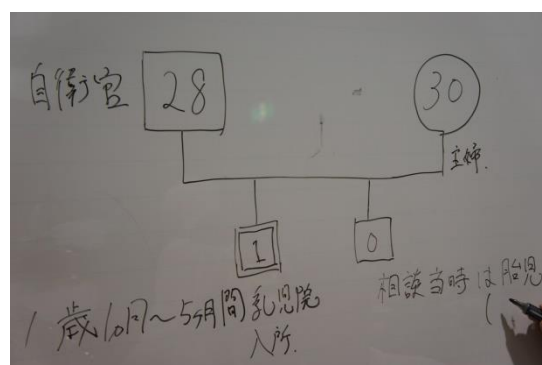
紹介したのは、エリザベス・ボット(1955)の「都市の家族～夫婦役割と社会的ネットワーク」という研究で、性別役割を前提としたカップルは、男には男の世界が、女には女の世界があると考えており、家族外で、男同士、女同士の密接な関係を結ぶ。友人・近隣・親類・同僚といった複数の役割が一人の人に重複しており、母と娘の絆は強く、女性同士の関係は濃密でサポートを提供しあっていた。逆に、性別役割を超えた夫婦では、近隣や親族とのネットワークは希薄で、夫婦共通の趣味や友人関係を持ち、ともに時間を共有し、夫婦の絆が強いという結果が出ていた。

昨年から気づいていることであるが、たとえば、会場となった公民館がある大湊では自衛隊が6割、ひとつの小学校に6年間留まる子どもはほとんどいないという現状のなかで、どのようにジェンダーの問題を扱うことができるのか。関係性に生きるとは望ましいことだと思うが、しがらみや望まない役割を担わされることを避けようと、都市部では関係性を希薄にしたのだった。力の格差、とくに現代社会では貨幣価値によって選択肢が決まってしまう。ケア役割は、家庭でも職場でも圧倒的に女性の

肩にかかること、役割が固定化し関係が閉鎖すると暴力の温床となるリスクがあること、ネットワークからはずれた人は居場所がないことなど、答えのない問題提起である。閉鎖させず変化の風を吹き込むこと、ネットワークからこぼれた人との結び目をどう作るのが課題だろう。

実践編では、児相と学校から地域の事例を提供してもらい、ジェノグラムを用いて事例検討をした。50名ほどの参加者だったが、なるべく所属をバラバラにして6名程度のグループに分かれてもらった。最初の事例は、妊娠6ヶ月の母親が流産の危険があって入院したいが、1歳の子を乳児院に預けるという判断をした事例、二番目は中学で不登校からひきこもり傾向のある少年の事例だった。背景となる家族事情を考えながら、家族の見立て、母親の成育歴、地域との関連などの視点から家族の強みを見つけて伸ばしていくための支援を考える。初めは緊張の高かった参加メンバーも、グループで話すうちに少しずつほぐれていった。最初は事例の難しさにばかり眼がいていたが、グループで協力し、自衛隊経験者を含め多様な背景の方々がそれぞれの立場や視点の違いを活かして知恵を出し合い、事例像を膨らまし、少しずつ家族の肯定的な力を見つけ、見立てを変えていくプロセスは感動的でもあった。

初年度の支援者支援セミナーのバズセッションで、むつの支援者の課題として多職種連携ができていないという声があって、「来年は、多職種混合の小グループで事例検討を行うワークショップをやるとよいかもしれませんね」と言ったのだが、それを理想的な形で実現してもらった形だった。



打ち合わせや反省会、懇親会の場で、各機関のスタッフたちから肯定的なフィードバックを多く聞いたが、なかでも、「このようなイベントを教育委員会、児童相談所、公民館、図書館が一緒になってやるのは初めてだった。むつの支援者たちが、このようにネットワークし、むつの家族のために力を合わせることができれば、十年後にはむつの家族が幸せになっているのではないか」という言葉を聞き、このプロジェクトをきっかけに、むつのコミュニティがエンパワメントされていくとしたら素晴らしい

と思った。私たちの役割は、何はともあれ外から定期的にやってくるというところにあるのかもしれない。

懇親会では、どちらかと言えば面白おかしく下北の人々の生活について教えてもらったが、熊やカモシカが現れて畑を荒らし困っているという話、青森は何でも国際とつけ研修生の外人たちが「地吹雪」まで観光にしてしまったという逞しさを見習わなければいけないという話のほか、海上自衛隊が誤って鉄砲を撃った話（車に当たった）や訓練機が頭上 50 メートルを飛んだ話、上から物が落ちてくる話など笑い話のように

話されたが、胸の痛む話だった。タクシーの運転手さんも、釜伏山にたくさんのレーダーがあって怖いという話をしていた。沖縄の話は聞いていたが、下北の話は知らなかった。

厳しく美しい大自然に抱かれて培われてきた下北の暖かさをもっともっと知りたいし、苦難と抵抗の歴史について学びたい。お父さんのためにパンを焼いていた子どもたちの笑顔が、本州のてっぺん下北から京都までどんな形で届いてくるのか楽しみに待とう。



毎年恒例になった反省会と記念撮影